

彙報

京都大学文学部哲学科卒業論文題目

昭和四十七年三月

哲学

池田重信 プラトンにおける「哲学」の意義
魚住洋一 判断の発生的構成の問題

——フッサール『形式的及び先験的論理学』
を手掛りとして——

大西英一 サルトルの存在論に於ける基礎的問題

野元久義 ヘーゲル論理学

浅井勉 超越論的自由と実践的自由

沢田都仁 形式と根拠

——有限性としての時間への試論——

西洋哲学史

石原涉 ヘーゲル『精神現象学』における認識論的諸問題についての若干の考察

——その「緒論」を中心として——

角田利幸 純粹理性批判「純粹悟性概念の演繹」について

片木啓 ヘーゲル論理学（始元論を中心として）

光永克史 人間の諸徴表とその疎外態
——労働を基礎とした考察——

増田三彦 トマスにおける現実態と可能態

浦田輝英 フッサールに於ける純粹論理学の理念

竹内亨 『カントと形而上学の問題』に於けるハイデッ

ガーの思索

松島哲久 メルロー・ポンティにおける「知覚」の問題に

ついて

野尻真介 ベルグソンに於ける自由の問題について

上田恭彦 カント『純粹理性批判』に於ける認識の客観的

実在性と存在のあり方

中川俊隆 フーコー解釈の試み

印度哲学史

茂木明三 大史詩にみられる Sankhya 思想

嶋野文明 Bhagavad-gita に於ける知識と実修と信仰に

ついて

心理学

井上和郎 日本の浪花節的心理

——主に文化面において——

上野留美子 乳幼児期における自己像把握について

岸田容子 図形分類における訓練効果の発達的变化

倉谷佐千代 家族集団の研究

坂根照文 直線走路に於ける部分強化

——弁別仮説及び注意説についての一検討——

高野和行 概念達成過程の研究

田島和恵 集団と逸脱

野口久 『死の家の記録』を中心としたドストイエフスキイ文学に見られる犯罪、拘禁等の社会病理学的考察

藤中一郎 白ネズミにおける模倣学習

丸岡令子 集団発達

師井悦子 集団規範について

横川真知子 日本語の syntax を習得した児童による英語の syntax をもつて言語の学習について

上田雅治 一般行動論への試論

江尻司 児童の説得性

柏田幸介 集団圧力と集団標準に関する研究

若原昭子 態度変容とパーソナリティ

関哲 図形認知の発生条件と経験効果

畑逸子 態度変容に関する研究

倫理学

岡山光次郎 E・フッサール現象学に於けるノエマについて

驚田清一 E・フッサールにおける他我の問題

——『デカルト的省察』第五省察を中心

に——

榎本百合子 シモーヌ・ヴェイユの「愛の愚か」について

大町公 責任の自覚について

——Dietrich Bonhoeffer の責任〈Verantwortung〉概念を手引として——

藤野博美 J・P・サルトルの疎外論

——『存在と無』を中心とする予備的研究——

美学美術史学

植森順一 シラーにおける美的教育の問題について

大坪健二 カントにおける美の構造

大西由見子 俵屋宗達その出現と意義

愛宕出 ゴシック建築について

中島博 宗達の絵画

中本道代 ベルシアに於けるイスラム建築の建築装飾

藤井道子 色彩

島本 澆 Charles Rennie Mackintosh にあつて

中島徳博 象徴的形式としての芸術

吉川登 マニエリスムと後期ミケランジェロ

田中進 明治新日本画—初期日本美術院の追求(朦朧体)をめぐる

——菱田春草を中心に——

戸田伸子 ハイデガー『芸術作品の源』を中心とした理

念と現象の問題

社会学

馬場清

——イデオロギーの特質とその機能——
「集団論構成」の問題点
——機能主義的な考え方を中心として——

黒谷哲夫 疎外論を基礎に社会病理（自殺・神経症）への
アプローチ

宗教学

自派謙吉 大衆社会とパワーエリート

鈴木千明 遊びと余暇

千葉芳夫 転向における価値観の変換について

中川宗司 レヴィ・ストロースの親族理論について

藤田栄史 マックス・ウェーバーの官僚制論と合理性

上野千鶴子 情報行動論

坂田雅子 レヴィ・ストロースにおける人類学の構造論的
方法

白橋茂

住吉彬孝 現代における宗教のあり方
——Zur Seinfrage を巡って——

須山康文 町会議員選挙と選挙運動集団

筒井清忠 ローレンツ・フォン・シュタインの社会学思想

中川誠一郎 官僚制研究のための予備的考察

橋本満 社会構造論

松本正樹 現代犯罪に関する一試論

小野宗行 ギュルヴィッチ社会学の研究

北村民生 芸術発生の社会的基盤

木村洋二 パーソナリティ体系と社会体系の力動的関係に
関する一考察

清水周

高丘俊 宝積経における菩薩のあり方について
——中辺分別論第一章の研究——

西田敦子 現代中国

キリスト教学

中谷 俊子 キェルケゴールの「イロニーの概念」の一考察

京都大学大学院文学研究科(哲学科)

修士課程修了論文題目

——昭和四十七年三月——

哲 学

中村 祐三 カントの自然哲学

杉山聖一郎 カントの目的論

——主としてその認識論的省察——

布施 佳宏 J・P・サルトルの身体論

河野 勝彦 デカルトにおける感覚知覚と外界の認識につい

て

両角 英郎 ヘーゲル哲学における思弁性と実証性

倫 理 学

安彦 一恵 G・W・F・ヘーゲルに於ける理想と現実

——体系以前期を中心として——

中国哲学史

西脇 常記 劉知幾

——史官の歴史観——

印度哲学史

土橋 恭秀 ウッターラードウヒヤヤナースートラについて

——そのレーシユヤー論を中心として——

西洋哲学史

溝口 宏平 ハイデッガーに於ける歴史

——現有の歴史性と有の命運——

藤本 雄三 トマス・アクィナスの VERBUM 論

——本質とベルソナ——

小浜 善信 アヴグスティヌスの renovatio について

——意志論を中心として——

依田 義右 マルブランシュにおける叙知的延長について

種村 完司 自己意識と認識の客観性

——カントからヘーゲルへ——

鎌田 邦宏 ミレトス哲学

円増 治之 ニヒリズムの克服の可能性

——ニーチェを連して——

内山 勝利 ドクサについて

——ON KALMHON の意味するもの——

牧野 澄夫 D. Hume の因果性批判について

——哲学的関係と自然な関係——

宗 教 学

米沢穂積 信仰と思惟

——ヘーゲル宗教哲学を基礎として——

高田信良 自然的意識と真実知

——「非」宗教的在り方の考察に向けて——

奥田愛子 キェルケゴールにおける関係性について

爾 吼明 P・ティリッヒにおける理性と啓示について

仏 教 学

早 島 理 菩薩行の哲学

——Mahāyānasūtrālamkāra を中心として——

中谷英明 Udanavarga の総合的研究のための基礎作業I

——Udanavarga 諸異本・関係諸経論の比較

分析的記述と Sarvasivadin, Mulasar-

vastivadin に関する若干の考察——

キリスト教学

石橋 隆 ヘーゲル『精神現象学』における「不幸な意

識」について

湯浅忠優 キルケゴールにおける「実存弁証法」の問題に

ついて

——その解釈学的問題を中心に——

心 理 学

梅村智恵子 思考における言語の意味とイメージについて

田尾雅夫 地位非整合 (Status incongruence) における

葛藤と集団構造の変容についての一考察

三浦俊彦 生活意識の諸類型

梶山方孝 音声言語による印象形成

梶 雅雄 図形認知と錯視現象に関する一試論

社 会 学

木田融男 マックス・ウェーバーにおける社会変動論の批

判的考察

森田三郎 レヴィーストロース人類学の方法論的検討

——構造論的方法の意義に関する一考察——

佐々千春 疎外の問題に関する一考察

美学美術史学

米沢有恒 芸術と Wohnungsnut

——Heidegger の芸術解釈——

曾布川寛 朝川図巻考

——郭忠恕本を中心に——

斉藤仁作 フィードラー芸術論研究

——芸術考察に特有な「立場の反省」を経た

芸術哲学として——